神戸女学院大学論集　第60巻第１号　Kobe College Studies Vol. 60 No. 1（June 2013）

エミリ・ディキンスンと日本の花（１）

―*Lonicera Japonica* 日本産スイカズラ―

鵜　野　ひろ子

Emily Dickinson and Japanese Flowers (1):

Lonicera Japonica Japanese Honeysuckle

UNO Hiroko

神戸女学院大学 文学部 英文学科 教授
連絡先：鵜野ひろ子　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部英文学科
hirouno@mail.kobe-c.ac.jp

要　旨

米国の詩人 Emily Dickinson は生前、友人や近所の人々の間では優れた園芸家として知られていました。彼女はまた植物標本帳を作っていましたが、その中に *Lonicera Japonica*（日本産スイカズラ）と *Chaenomeles Japonica*（ボケ）の花の押し花があります。本論では、彼女がその日本産スイカズラをどのようにして手に入れたかを考察します。

一般には、日本産スイカズラは、1862年に George Rogers Hall によって、他の植物と共に横浜からロングアイランドの Parsons という養樹園に運ばれ、そこで増やされてアメリカ中に広まったとされています。日本産スイカズラはその甘い香りと蜜のおかげで、当時、人々を魅了したそうですが、やがて米国東部の気候や土壌に適合し、特に東南部ではその土地の植物を駆逐し、繁茂してしまったので、今ではひどく嫌われているそうです。Judith Farr は *The Gardens of Emily Dickinson* の中で、Dickinson の植物標本帳にある日本産スイカズラは Parsons 経由のものだとしています。しかし Dickinson はその花の標本のところに、*Lonicera* というラテン名しか書き込んでおらず、その後ろに長いダッシュを付け加えています。もし、Parsons 社から手に入れたのであれば、ダッシュの代わりに *Japonica* という名前を入れたに違いありません。ですから、彼女の日本産スイカズラは Parsons 経由のものではないようです。

他にも Dickinson の日本産スイカズラの入手方法が幾つか考えられますが、1853年と1854年、ペリーの日本遠征の際に Samuel Wells Williams と James Morrow が日本で採集した植物の一つをもらった可能性が最も高いと思われます。彼女は日本の植物が到着した直後に、ワシントン DC に国会議員であった父親を訪問していましたので、日本から来た植物を見学し、その際に一株もらったのかもしれません。そうであれば、ペリーの『日本遠征記』の第２巻に収録するため、採集した植物のリストがエイザ・グレイ教授によって作成される前であり、まだ標本が特定されていなかったため、*Japonica* という名前を付けることができなかったと考えられます。

キーワード：日本の花、エミリ・ディキンスン、植物標本、日米関係、スイカズラ

Abstract

During her life, the American poet Emily Dickinson was well known as a good gardener among her friends and neighbors. She also made her own herbarium, in which there are pressed flowers of *Lonicera Japonica* (Japanese honeysuckle) and *Chaenomeles Japonica* (Japanese quince). In this paper I investigate how she may have obtained the Japanese honeysuckle.

It is known that Japanese honeysuckle, together with other new plants, was brought from Yokohama to Parsons & Company, a nursery in Flushing, Long Island, by George Rogers Hall in 1862, and that the plants were subsequently taken all over the United Sates. Although the honeysuckle was welcomed with fascination at that time because of its sweet fragrance and nectar, it is now widely reviled since it "proved so well adapted to the climate and growing conditions" that "it has become a pernicious weed that plagues foresters and naturalists throughout much of the southeast." Judith Farr in *The Gardens of Emily Dickinson* takes the honeysuckle in Dickinson's herbarium to be from Parsons & Company, but Dickinson inscribed only the Latin name *Lonicera* for her specimen, with a long dash after it. If she had obtained the plant from Parsons & Company, she would surely have put "*Japonica*" where she has the dash. This suggests the possibility of a different source.

Dickinson's Japanese honeysuckle might have originated from the Japanese plants that Samuel Wells Williams and James Morrow collected in Japan by the order of Commodore Perry during the Expedition to Japan of 1853 and 1854. Dickinson might have been given the plant when she visited her father in Washington, DC, in February, 1855, just after the plants arrived, and before Asa Gray formally identified them to be listed in the second volume of Perry's *Narrative of the Expedition.*

Key words: Japanese Flowers, Emily Dickinson, herbarium, Japan-US Relationship, Honeysuckle

米国の詩人エミリ・ディキンスン（Emily Dickinson）（1830-1886）は植物学に詳しく、彼女の詩の中には多くの花が登場し、それぞれの詩の中で重要な役目を果たしています。またしばしば知人や友人へのお祝いや慰めに自分で育てた花を手紙に添えて届けていましたので、彼女は生前には、園芸家として周囲の人々に知られていました（Furr 3）。ディキンスンは友人への手紙の中で自分の詩を引用するなどしていましたので、詩を書いていることを知っている人はいましたが、それよりも彼女が花を育てているということの方がよく知られていたのです。1862年９月26日には、ディキンスン家が購読していた『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』紙に「ハムデン園芸展」（Hampden Horticultural Exhibition）についての記事がありましたが、その中に花の部門の受賞者のリストがあり、Best Pair Hand Bouquets の２等賞を得た人として、E. Dickinson という名前が挙がっていました。この E. Dickinson は周囲の人々にしばしば花束を贈っていた Emily Dickinson のことではないでしょうか？長年、花を育て、花束を贈っていた詩人はきっと花束を作るのにも長けていたに違いありません。

また、父親のエドワード・ディキンスン（Edward Dickinson）は自分の父親の借金を返済し、一旦は手放した屋敷を1855年に6000ドルで買い戻し、5000ドルかけて相当な建て増しを行いました（Habegger 338-39）。その折に、娘のエミリのために当時はまだ珍しかった温室まで作ってやっています。ジュディス・ファー（Judith Furr）は、19世紀半ばのヴィクトリア時代には、女性は詩を書くのが上手というよりも園芸に優れている方が良いと思われていたからだろうと言っています（4-5）。残念ながらその温室は現存していませんが、エドワード・ディキンスンは娘の園芸の技術を高く評価し、自慢に思っていたのかもしれません。その温室では、海外からもたらされた珍しい植物も育てられていたようです。また、一般には水栽培するような花を地面で育てると言う高度な技術も彼女は持っていたようです。さらにファーによると、1874年にはアマーストのコモンの計画に際して、NY のセントラル・パークやハーバード大学のアーノルド植物園のデザイナーとして有名な園芸家であるフレデリック・ロー・オルムステッド（Frederick Law Olmsted）がエミリの兄のオースティン・ディキンスン（Austin Dickinson）を訪問した際、ディキンスン家のバラの植え方に興味を抱いたそうで、ファーはそのバラはエミリが育てたものではないかと言っています（17）。

さらに、ディキンスンは植物標本帳を作成していました。14歳の時には、友人に植物標本を作成することを勧める手紙が残されています：

> . . . My plants look finely now. I am going to send you a little geranium leaf in this letter, which you must press for me. Have you made you an herbarium yet? I hope you will if you have not, it would be such a treasure to you; 'most all the girls are making one. If you do, perhaps I can make some additions to it from flowers growing around here. （L-6, To Abiah Root, 7 May 1845）

その後も押し花をしていることがわかる手紙が何通か書かれています[1)]。このように、10代の頃から標本を作っていたことはわかっていますが、いつまで続けていたかということはわかりません。リチャード・シューアル（Richard Sewall）は、ディキンスンが14歳を過ぎてからは、

植物標本のことは一切手紙に書いていないので、押し花作成や標本帳は14歳で卒業してしまった（“Science and the Poet” 19)、と言っていますが、そうでしょうか？実際、ハーバード大学のホートン図書館には、彼女が作製した立派な標本帳が保存されていて、2006年には、ハーバード大学出版部からそれをカラー写真で再現した本が出版されました。標本帳は縦約15インチ（約37センチ)、横11インチ（約28センチ）の大判で、標本のページだけで66頁に及びます。私は再現された写真のものしか見てはいませんが、それを見ますと、押し花にされた花の色が100年以上経てもそれほど褪せていません。ですから、彼女はよほど押し花作製に熟練していたように思われます。またその中には、何種類ものジャスミンやサボテンなど、熱帯の植物が含まれています。彼女は父親に作ってもらった温室で熱帯の植物を育てていたことも知られていますので、もし温室で育てたものを標本にしていたのなら、これは1855年以降の標本に違いありません。また、海外の珍しい花を1844年、14歳の時には簡単に手に入れることはできなかったはずです。ですから、この標本帳は、シューアルの言う14歳の作品ではなくて、もっと時間をかけて作製されたものか、あるいはもっと後に熟練してから作製されたものではないかと思われます。ただ、それぞれの押し花に、採集日や採集場所などが記録されていませんので、実際、この標本帳がいつ頃からいつ頃までの間に作製されたものかは不明です。

さて、その標本帳の中に日本の花が２種類、日本産スイカズラ（*Lonicera Japonica*）と、当時Japonicaと呼ばれていたボケの花（*Chaenomeles Japonica*）がありますので、それらの花がいつどのようにして彼女の手に入ったのか、調査しました。今回は日本産スイカズラについてのみ報告します。

次の表はディキンスンが標本帳を作製した折に、スイカズラ（honeysuckle）の押し花に彼女が付けた名称と、復刻版を出版する際にわかった現在の植物学の分類による名称を並べたものです。(なお、5.1.というのは、今では使われていませんが、リンネによる植物分類上の綱と目の番号です)。

	ディキンスンが使った当時の名称	現代の植物学による名称
p. 4	*Lonicera, parviflora.* 5-1.	*Lonicera dioica:* LIMBER HONEYSUCKLE
p. 7	*Xylosteum, ciliatum.* 5-1.	*Lonicera Canadensis:* AMERICAN FLY HONEYSAUCKLE
p. 50	[unlabeled]	*Lonicera tatarica:* TATARIAN HONEYSUCKLE
p. 52	*Lonicera* ——. 5-1.	*Lonicera* sp.: HONEYSUCKLE [*Lonicera japonica:* JAPANESE HONEYSUCKLE]
p. 62	*Lonicera* ——. 5-1.	*Lonicera* sp.: HONEYSUCKLE [*Lonicera periclymenum:* WOODBINE]

このように、66頁ある標本帳の初めの方と、後の方に、5種類の *Lonicera* スイカズラ科スイカズラ属の花の押し花があります。しかしディキンスン自身が、honeysuckle（*Lonicera*）と確認していたのは、左の欄を見るとわかりますように、3点だけで、現在の植物学の知識で見ると、その他に2点あったことがわかります。その中で、52頁の一つの押し花の上に、"*Lonicera*——. 5-1." と書かれた細長い紙のラベルが茎の上に貼られたものは、実際には、"*Lonicera* sp.: HONEYSUCKLE / [*Lonicera japonica:* JAPANESE HONEYSUCKLE] だったことがわかったのです。ですから、ディキンスン自身はそれが日本特有種と知らずに、ただ *Lonicera* の一種として、——を付けて記したのか、それとも日本から来たものと知っていても、学名を知らなかったので、ただ後ろにダッシュを付けただけにしていたのか。あるいは、それを手に入れた当時は、まだ米国に届いたばかりで、それに *Lonicera japonica* という学名がまだ付けられていなかったから、——とするしかなかったのかもしれません。

では、どのようにして、その Japanese honeysuckle がディキンスンの手に入ったのでしょうか？これまで、ディキンスンの住んでいたニューイングランド地方に、Japanese honeysuckle が入って来たのは1862年だとされてきました。ディキンスンが栽培に際して参考にしていた可能性が高いと言われているもので（Farr 70）、1859年に出版されたジョゼフ・ブレック（Joseph Breck）による『花の庭園—ブレックの花ガイド—』（*The Flower Garden or Breck's Book of Flowers*）というガイドブックには、アメリカ土着の4種類の Honeysuckle の他に、ディキンスンの標本にあった62頁の *C. periclymenum.* — Woodbine. がありますが、これはイギリスから入ってきたものだそうです（226）。また、ディキンスンの標本にはない、オランダ産の Dutch Monthly Sweet-scented Honeysuckle 、*C. flexuosum,* or Chinese Honeysuckle や、イタリア産のスイカズラが紹介されていますが、日本産のものは紹介されていません。ですから、1859年には Japanese honeysuckle はまだ米国では一般には知られていなかったようです。

スティーヴン・A・スポングバーグ（Stephen A. Spongberg）の論文「ニューイングランド地方に初めてもたらされた日本の植物」（"The First Japanese Plants for New England"）（1990）によれば、上海で小さな病院を開いていたロードアイランドのブリストル出身のジョージ・ロジャーズ・ホール（George Rogers Hall）という医師が、マサチューセッツ州チェスナットヒルのフランシス・リー（Francis Lee）の依頼を受けて、1861年に日本の生きている植物の苗をウォーディアン・ケース[2)]を使って、数多くニューイングランドに送りました。ところが、依頼したリーはリンカーン大統領の要請で戦地に赴くこととなったので、それらの植物を、歴史家で園芸家のフランシス・パークマン（Francis Parkman）に委託したのでした。そこで、パークマンはマサチューセッツ州ジャマイカプレインにある自分の庭でそれらの植物を栽培しました。さらに翌年には、ホール自身が新たに日本で集めた他の植物と共に横浜を船出して、ロングアイランドのフラッシングにあった養樹園 Parsons & Company で繁殖させるため、それらの植物を自らアメリカまで運んだということです（2）。その植物の苗の中に *Lonicera japonica* が含まれていました（8）。この花は今では Japanese honeysuckle または単に honeysuckle と呼ばれていますが、米国東部の気候や土壌に適合し、特に東南部ではその土地の植物を駆逐しどんどん繁茂してしまったので、Japanese honeysuckle という名前がなければ、まるで土着の植物の様

で、日本からやって来たものだとはわからないくらいだそうです（8）。ただ、自生のアメリカの植物を駆逐してしまったので、初めの内は甘い香りと蜜で人々を魅了したこの花も、今では最初のヨーロッパからの探検家がアメリカにもたらしたノルウェーのドブネズミに譬えられるほど嫌われているようです（8）。

このように、これまでの研究によれば、Japanese honeysuckle は1862年頃、初めてニューイングランド地方にもたらされ、その後米国東部に根付いたというのが定説です。ですから、ファーは『エミリ・ディキンスンの庭』（*The Gardens of Emily Dickinson*）の中で、1862年にホールがロングアイランドにもたらし、株を増やした *Lonicera japonica* が後にディキンスンの手に入ったのだとしています（239）。しかし、もしそうであるとすると、ディキンスンはどうして、標本帳に *Lonicera japonica* と書かなかったのでしょうか？ディキンスンが手に入れた時には、その名称はまだなかったとすれば、ホールと Parsons & Company 経由のものではない可能性が高いと思われます。

一方、アリス・M・コーツ（Alice M. Coats）の『庭木とその歴史』（*Garden Shrubs and their Histories*）（1992）によりますと、攀縁植物であるこの花は日本から中国に入り、1806年にウィリアム・カー（William Kerr）によって広東から送り出され、東インド会社の重役会に紹介されて、初めて西洋にその存在が知られるようになったということです（123）。中国ではその花はその美しさと匂いの良さで非常に高く評価されていて、年を重ねるに従って白っぽい花びらの色が深まっていく様子から、"Gold and Silver Flowers" と呼ばれて珍重されていたそうです（123）[3)]。ディキンスンの母方の親類、ノークロス家の人々の中に、ボストンで中国の品を扱う貿易業者がいましたので（Uno, "Emily Dickinson's Encounter with the East" 45-48）何らかの手段で、中国で珍重されていた Japanese honeysuckle が中国経由でボストンに送られ、ディキンスンの手に渡ったという可能性はゼロではないと思われます。そうであれば、1862年以前に手に入った可能性もありますし、正式の学名がわからず、*Lonicera* の一種として、――が付けてあったのもうなずけます。ただ、そのようなことがあったことを証明することはできませんでした。

もう一つの可能性として、ペリー総督の日本遠征の時に採集した植物があります。ヘイゼル・ダーネル（Hazel Durnell）によれば、植物学はペリーの趣味で、日本遠征の間に収集した大量の植物を生きたまま持ち帰りました（4-5）。日本遠征中に植物や鉱物の採集に従事した一人ジェイムズ・モロウ（James Morrow）の日記を編集したアラン・B・コウル（Allan B. Cole）によれば、生きたままの植物が17ケース、物資供給船レキシントン号に載せられ、1854年９月９日香港を出発し、1855年２月16日にブルックリンの海軍工廠に到着しましたが、かなりの数の植物が航海に堪えて、生きていたということです。生きたまま運ばれた植物と標本にされたものの数は1500から2000種類と言われています（xx）。それが届いた1855年２月の、当時国会議員であったディキンスンの父親も出席していた第33回議会の議事録によりますと、ワシントン DC のキャピトル・ヒルにペリーの持ち帰った植物を育てる温室を建設するため、1,500ドルの予算が可決されています（*The Congressional Globe: the Official Proceedings of the 33rd Congress*）（Courtesy, National Archives of the United States）（Uno, "Emily Dickinson's Seclusion and Japan"

142)。その植物の一部は政府によってキャピトル・ヒルに造られた温室に植え替えられました。また多くの東洋の種子が実験に使われ、また農夫や園芸家に配布されたそうです。中国や、琉球、日本で集められた道具類、器具、布地などはNational Galleryに委託され、またスミソニアン博物館に置かれました（Cole xxi）[4]。

ペリーが日本から生きたまま持ち帰った植物のリストはないのですが、後にペリーの命令によって編纂され、1856年に出版された *Narrative of the Expedition to the China Seas and Japan 1852-1854*、いわゆる『ペリーの日本遠征記』の第2巻には「日本で採集された植物標本」（"List of Dried Plants Collected in Japan"）（305-32）が掲載されています。これは押花にした植物のリストですが、その中に、*Lonicera japonica* があり、下田で採集されたと記されています（313）[5]。1855年の2月から3月にかけてエミリ・ディキンスンはワシントンに国会議員であった父親を訪ねてワシントン見物をしていますので、日本遠征推進の立役者であったダニエル・ウェブスター（Daniel Webster）の支持者の一人であった父親エドワード・ディキンスンの家族として、日本から来た植物を見せてもらい、さらにはその珍しい日本の花をもらったのかもしれません。

実際に日本で植物・鉱物採集をしたのは、もともとミショナリーとしてマカオに滞在していて、ペリーの遠征時に通訳として働いていたサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams）と医師のジェイムズ・モロウ（James Morrow）[6] でした。彼らはペリーの要請で、日本の函館や横浜、下田で植物の採集を行いました。ウィリアムズが、アマチュアながら、熱心に日本の花や鉱物を採集し分類しているのを見て、ペリーは「なんと、我らの通訳者はこの地域の人々だけでなく自然の良き通訳者だ！」と、感心したそうです（Williams 190）。ウィリアムズとモロウが暇さえあれば植物や鉱物の採集をしたおかげで、かなりの数の植物の苗や押し花を持ち帰ることができ（190-91）[7]、しかもその中には、これまで世界に知られていなかった花が何種類も含まれていたことが後に判明しています（Williams 217-18）[8]。

さて、『遠征記』に掲載する植物のリストを作成することとなり、標本にされたものの一部がハーバード大学のエイザ・グレイ（Asa Grey）教授の下に送られ、それぞれの植物が特定され、リストが作成されました[9]。そして、*Lonicera Japonica* については、ツンベルグ（Caroli Petri Thvunberg）の植物図鑑などを参考に、特定したとあります（Hawks 313）。もし、ディキンスンがグレイのリスト作成の後に手に入れたものであれば、標本帳の押し花のところに、*Lonicera japonica* と書くことができたはずですが、ディキンスンの標本にはそう書かれていませんので、その特定の前に手に入れたはずです。ですから、まだ日本から届いたばかりの1855年の2月か、3月の間に、まだ特定されていない内に、その押し花を手に入れて、*Lonicera* ——として、標本帳に入れたという可能性が高いと思われます。

さらに、ウィリアムズはもともと1833年にアメリカン・ボードから中国広東に派遣された宣教師でした。『S・ウェルズ・ウィリアムズ博士の人生と書簡』（*Life and Letters of Dr. S. Wells Williams*）によれば、1844年にアメリカ政府から派遣され中国との貿易協定締結のためマカオに滞在していたケイレブ・クッシング（Caleb Cushing）は、ウィリアムズの印刷所と翻訳を頼りにしていていたようです（126-27）。クッシングと言えば、詩人の父親エドワード・ディ

キンスンと同じマサチューセッツ州出身のホイッグ党員でした。また1844年当時はエドワード・ディキンスンもマサチューセッツ州議会議員として、またボストンの貿易業者を親戚に持つ者としても、東洋貿易の振興にも熱心でしたので、クッシングと交流があったに違いありません（Uno, "Emily Dickinson's Encounter with the East" 48-51）。さらには、ディキンスン家と深い関係にあるアマースト大学はもともと宣教師養成を目的とした大学であり、アメリカン・ボードとも密接な関係にありましたので、エドワード・ディキンスンがウィリアムズとどこかで直接繋がりを持っていたことも考えられます。もしそうであれば、園芸に熱心な娘のために、父親がウィリアムズから彼の採集してきた花を直接もらったとも考えられるでしょう。その場合、まだグレイによって特定されていない内にもらったので、日本から来たものだとはわかっていても、*Lonicera*——としか、記せなかったのかもしれません。

さて一方、ディキンスンの手紙や詩に何か、ヒントは残されていなかったでしょうか？彼女が1853年の６月５日付けの当時ボストンにいた兄オースティンにあてた手紙の中に、"I am glad for 'The Honeysuckle"（L-125）とあります。わざわざ頭文字を大文字にし、引用符も付けていますので、よほど特別な花のように思われます。そして１年後の1854年６月初めの、やはりオースティンにあてた手紙に、次のように書かれています。

> I went out before tea tonight, and trained the Honeysuckle—it grows very fast and finely. // Both of them are full of buds. I take good care of the tree—give it a pail of water every day, and certainly it looks stouter, and we all think it will live.（L-165）

この手紙から、ディキンスンがどこかから手に入れた２株のスイカズラの苗を大変熱心に育てようとしていたことがわかります。1853年６月では、既にその苗が手に入っていたのか、あるいは手に入る予定だと言う情報に喜んでいたのか、どちらかわかりませんが、翌年の1854年の６月の場合は、既に苗を手に入れて、その苗が根付くように、注意深く育てようとしていたことがわかります。

さて、ペリーの日本遠征隊は1853年の７月の第１回目の日本訪問を終えた後、1853年の12月に１隻の船をワシントンに帰していますが、その船で採集した植物を "preliminary collection of specimens" として、送ったと言われています（Cole xviii）。ですから、ディキンスンの1854年の手紙に書かれている the Honeysuckle は遠征隊が最初に日本から持ち帰ったものという可能性もあります。

さらに、８年後の1862年の初夏のサミュエル・ボウルズ（Samuel Bowles）宛の手紙の中で、"Vinnie trains the Honeysuckle—and the Robins steal the string for Nests—quite, quite as they used to—"（L-266）とあり、妹のヴィニーがスイカズラの蔓が適当な方向に延びるように、調整をしていたことがわかります。ここでも、the Honeysuckle と、わざわざ頭文字を大文字にしているところを見ると、特別な花の様ですし、コマドリがこれまで通り、その蔓を巣作りのために使っているということを、quite, quite と言って、強調しているところを見ると、このスイカズラが自生のものとは異なったものなのに、いつも通りその蔓を使っているのに、感心しているのではないかとも思われます。この1862年のスイカズラと1854年の手紙の中で語られている花が同じものかどうか、またこれが Japanese honeysuckle なのか、別の種類かどうかまではわ

かりません。しかし他の花とは違って、手紙に何度も書いているところを見ると、ディキンスンがスイカズラを特別扱いしていたように思われます。よほどこの花が好きだったか、あるいは興味があったことだけは確かです。

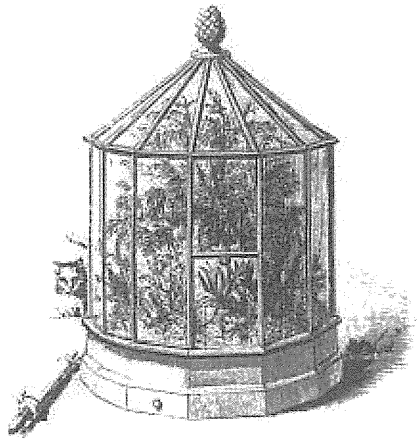
さて、これまで見てきましたように、日本のスイカズラがアメリカに渡った経路がいろいろあることがわかりました。しかし、ディキンスンの手紙が全て現存しているわけではなく、はっきりとした証拠がないので、実際どのような経緯で、エミリ・ディキンスンの手に渡ったかを断定することはできません。ただ、標本帳に、*japonica* と書かれていないところから見て、1855年にペリーの遠征によって持ち帰ったものを、グレイ教授が *japonica* と特定する前に手に入れたというのが、最も有力ではないかと思われます。

注

＊本研究は学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（23520348）の助成を受けた研究の一部です。
＊この論文は2012年12月22日、京都大学文学部で開催された日本英文学会関西支部大会で、招待発表したものの前半に、加筆・修正したものです。

1）1845年８月３日付けの Abiah Root への手紙の中で、ディキンスンは次のように書いています。“Have you got any Forget me not in your garden this summer. I am going to send you as a present in my letter next time. I am pressing some for all the girls and it is not dry yet”（L-7）. 同じく1845年９月25日にも、“Have you any flowers now? I have had a beautiful flower-garden this summer; but they are nearly gone now. . . . I would love to send you a bouquet if I had an opportunity, and you could press it and write under it, The（sic）last flowers of summer. Wouldn't it be poetical. . . .”（L-8）と、書いています。

2）ウォーディアン・ケース（Wardian case）というのは、1829年頃に英国のナサニエル・バグショウ・ウォード（Nathaniel Bagshaw Ward）（1791-1868）によって考案された植物の苗を生きたまま運ぶことができるガラスでできた入れ物です。（“Wardian Case,” *Wikipedia*. 26 July 2012. 3 November 2012. http://en.wikipedia.org/wiki/Wardian_case）



3）なお、コーツによれば、スコットランド生まれの植物収集家で、ロンドンの園芸協会の植物収集員であったロバート・フォーチュン（Robert Fortune）が長年中国から数多くの植物を英国に送っていました。そして1860年から1862年には日本にも行き、日本の植物も収集し、アメリカに送ったということです。そしてその中に *Lonicera* スイカズラもあったようですが、それはあまり花は咲かないけれど葉が良く茂るその亜種である *Lonicera japonica* var. *aureo-reticulata* であって、純粋の *Lonicera japonica* で

はありませんでした（124）。ディキンスンの *Lonicera japonica* は花の咲くものですので、フォーチュンがアメリカに送ったものではなさそうです。

4) 徳川将軍からフランクリン・ピアース（Franklin Pierce）大統領に贈られた贈り物はスミソニアン博物館で見ることができるかもしれないということです（Cole xxi）。

5) ペリーの命令で植物採集をしたモロウの1854年４月21日の日記には、下田で約20種の新種の花を採集したとあります。

> I went on shore at the point nearest the shipping and opposite the villages. In a walk of a few steps up the small fresh water branch, I found about twenty new flowers. They were opening very fast, as spring was advancing rapidly. Vegetation was much more advanced here than at Yokohama, fifty or sixty miles north. (160)

また、５月１日の日記には、次のように書かれています。

> I went further up this large valley than before and found it increasing in beauty and in the breadth of the terraced hill sides. I found many new flowers—among them the paper tree from the bark of which they manufacture all their fine strong paper. It grows wild on the rich hill sides and near the hedges.

6) コウルによれば、ジェイムズ・モロウ（1820-1865）はサウス・カロライナ州出身で、the Literary University of Franklin College 卒業後、the University of Pennsylvania で医学を２年間学び、また1848-49年には the Medical College of the State of South Carolina で研究しました。ペリーの遠征でのモロウの仕事は極東の国々、特に日本に、米国から植物の種子や苗を配布し、最新の科学の情報を伝え、また米国の農業機器を日本に紹介すること。さらには、極東で植物の種子や苗、また動物や鉱物の見本を持ち帰って、西洋の知識を豊かにし、アメリカの博物館に貢献し、米国の農業の進歩に役立つことでした（vii-xv）。彼は毎日、植物の世話をし、日誌を付け、外科医の助手を務め、一般的な病気になった船員の診察をしました（xviii）。彼は1853年３月６日ヴァンダリア号でデラウェア湾を出港し、リオデジャネイロ、喜望峰経由で、マカオに７月21日に到着しました。約６か月、香港、マカオ、広東、日本などを探検した後、収集した動植物・鉱物の予備的な見本を米国に送っています（xviii）。18週間の日本訪問の間に、モロウは米国の植物の種子や苗を配布し、また日本のそれらを収集するという任務を遂行し、また、将軍徳川家定に農業器具を見せるなどしました（xix）。しばしば夜には、その日採集した植物の標本を作製しました。そして、供給物資輸送船レキシントン号に乗って、17個の植物の苗のケースと中国人の助手一人と共に1854年９月９日に帰国の途につき、1855年２月16日に、ペリーの米国帰国の１か月後に、ブルックリンの海軍工廠に到着しました（xx）。

7) モロウの1854年３月21日の日記に、横浜で珍しい花を採取したことが次のように記されています。

> I was on shore at an early hour, the wind blowing very fresh. I opened the box containing the hydraulic ram, and put the workman to work to fix it in a thick plank. I went to the hills with Dr. Williams to look for a place having a suitable fall of water to try the ram. We walked more than a mile and found several small streams, but none having a sufficient fall. We found on the hillsides several new flowers and some plants that would be very interesting to take to the United States—among them the native Camilia (sic) Japonica, two new rosacea, (raspberry), and a very pretty little vine. I dug them up carefully to set out in boxes to try and take them home, but I feared very much that ship life would not agree with them, from my previous experience. (emphasis mine) (141)

8) コウルによれば、新たに41の種と、１つの属が見つかったということです（xxi）。一つの植物 *Lonicera [Xyloeteum] Morrowi* と１種の藻（*Polysiphonia Morrowii*）は函館で発見されたものですが、収集者のモロウにちなんで名づけられたそうです（xxi）。

9) 苔に関しては Mr. W. S. Sullivant が、藻に関してはアイルランドのダブリン大学の Professor William H. Harvey が、シダ類に関してはイェール大学の Mr. Daniel C. Eaton が担当しました（Cole xxi）。

Works Cited

Breck, Joseph. *The Flower Garden or Breck's Book of Flowers.* N.Y.: A. O. Moore, Agricultural Book Publisher, 1859. Print.

Coats, Alice M. *Garden Shrubs and their Histories.* N.Y.: Simon and Schuster, 1992. Print.

Cole, Allan B. "Introduction." *A Scientist with Perry in Japan: the Journal of Dr. James Morrow.* Chapel Hill: the University of North Carolina Press, 1947. vii-xxvi. Print.

Dickinson, Emily. *The Letters of Emily Dickinson.* Ed. Thomas H. Johnson and Theodora Ward. 3 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1958. Citation by letter number. Print.

Durnell, Hazel. *Japanese Cultural Influences on American Poetry and Drama.* Tokyo: The Hokuseido Press, 1983. Print.

Eberwein, Jane Donahue, ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia.* Westport, CT: Greenwood Press, 1998. Print.

Emily Dickinson's Herbarium. A Facsimile Edition. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard UP, 2006. Print.

Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson.* Cambridge, MA: Harvard UP, 2004. Print.

Habegger, Alfred. *The Life of Emily Dickinson: My Wars Are Laid Away in Books.* NY: Random House, 2001. Print.

"Hampden Horticultural Exhibition." *The Springfield Daily Republican.* September 26, 1862. [Courtesy, Amherst College Frost Library]

Hawks, Francis L., ed. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy.* Washington: Beverley Tucker, 1856. Print.

Holloran, Peter. "Webster, Daniel." Eberwein 304-305. Print.

Longsworth, Polly. "Edward Dickinson." Eberwein 68-69. Print.

Morrow, James. *A Scientist with Perry in Japan: the Journal of Dr. James Morrow.* Ed. Allan B. Cole. Chapel Hill: the University of North Carolina Press, 1947. Print.

Rives, John C. *The Congressional Globe: the Official Proceedings of Congress 33 Congress.* Print. (Courtesy, National Archives of the United States)

Sewall, Richard B. "Science and the Poet: Emily Dickinson's Herbarium and 'The Clue Divine'." *Emily Dickinson's Herbarium.* 19-34. Print.

————. *The Life of Emily Dickinson.* 2 vols. N.Y.: Farrar, Straus and Giroux, 1974. Print.

Spongberg, Stephen A. "The First Japanese Plants for New England." *Arnoldia* 50.3 (1990): 2-11. Print.

Uno, Hiroko. "Emily Dickinson's Encounter with the East: Chinese Museum in Boston." *The Emily Dickinson Journal* (the Emily Dickinson International Society) 17.1 (2008): 43-67. Print.

————. "Emily Dickinson's Seclusion and Japan." *Kobe College Studies* 58.2. (Dec. 2011): 129-50. Print.

鵜野ひろ子. 「エミリ・ディキンスンと日本の開国」。新倉俊一監修、『エミリ・ディキンスンの世界』。東京：国文社、2011年3月. 270-84. Print.

"Wardian Case," *Wikipedia.* 26 July 2012. 3 November 2012. http://en.wikipedia.org/wiki/Wardian_case.

Williams, Frederick Wells. *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL.D.* N.Y.: G. P. Putnam's Sons, 1889. Print.

（原稿受理日　2013年2月27日）